

三水会会報

北里大学海洋生命科学部
同窓会会報 第 68 号

平成26年9月発行

編集者 内藤 文隆

発 行 三水会（北里大学
海洋生命科学部同窓会）

事務局 〒246-0031 神奈川県
横浜市瀬谷区瀬谷5-22-1
TEL フリーダイヤル
0120-873-135

目次／海洋実習風景	P. 1
平成26年度三水会定期総会報告	P. 2
"	P. 3
学部長就任挨拶／職場紹介	P. 4

野村節三先生近況	P. 5
準会員活動報告	P. 6
生化研究室親睦会／シルクロード書評	P. 7
新刊紹介／お知らせ	P. 8



7月完成の大船渡魚市場



実習風景



舟作海岸（三陸）での磯採集

〔平成26年度 三水会定期総会報告〕

平成26年5月17日（土）午後5時30分より北里大学白金キャンパス薬学部1号館5階1507教室において平成26年度三水会定期総会が開催されました。

総会構成員52名中、本人出席35名、委任状提出15名、欠席2名の定足数確認後、議長に増殖学科5期：村津裕氏、議事録署名人に増殖学科4期：石井美華氏と品学科3期：鈴木潤一氏を推薦、承認されました。

続いて第2号議案の平成26年度事業計画案及び予算案が各担当者より説明され、原案通り承認されました。

そして、第3号議案の三水会規約改正及び準会員活動助成要綱改正について会長より説明され承認されました。

*三水会規約改正案については平成26年3月末で、水産学部生がすべて卒業したことにより三水会規約上水産学部表記をすべて海洋生命科学部と改めました。

平成25年度収支決算書 平成26年3月31日現在

支出の部			収入の部		
科 目	予算額	決算額	科 目	予算額	決算額
1. 事業費	3,350,000	3,017,780	1. 部会助成金	4,877,000	4,877,000
(1) 会報の発行費	2,150,000	1,986,130	2. 会報郵送料補助	641,000	641,000
(2) 三水会HPの運営費	200,000	157,050	3. 前年度繰越金	2,742,821	2,742,821
(3) 親睦会の開催費	200,000	395,000	4. 預金利息	3,000	769
(4) 同期会等助成費	200,000	106,000	5. 雜収入	10,000	10,000
(5) 大学生との懇談会費	100,000	60,600			
(6) 講演活動助成金	200,000	200,000			
(7) 就職ガイダンスの開催費	250,000	63,000			
(8) 渔船海難遭児育英会寄付	50,000	50,000			
2. 運営・管理費	2,370,000	1,857,100			
(1) 印刷・通信費	420,000	221,019			
(2) 会議費	700,000	599,040			
(3) 総会費	250,000	198,676			
(4) 事務局費	950,000	806,865			
(5) 慶弔費	50,000	31,500			
3. 予備費	2,553,821				
4. 次年度繰越金		3,396,710			
合 計	8,273,821	8,271,590	合 計	8,273,821	8,271,590

- また、課外活動助成として行った活動を踏まえ準会員活動助成と改めました。
- 総会終了後、第25回北里大学同窓会研究者奨励賞受賞の増殖学科28期：佐藤成祥氏より研究課題の講演が行われました。
- その後、来賓にお招きしました緒方学部長より海洋生命科学部の近況等について説明があり、役員との質疑が行われました。
- また、在学生の就職活動に卒業生からの協力をこれからも継続し
1. 会報の発行
同窓生の動向、海洋生命科学部の現状、および各種情報を含む会報を平成25年9月と平成26年3月に二回発行した。
2. 三水会ホームページの運営管理
会員に対し本会の各種情報を提供した。
3. 会員の現状の把握
全学同窓会と連携し、会
4. 親睦会の開催
関西地区の会員を主な対象とした親睦会を平成25年7月15日（日）に大阪市にて開催した。
- また、平成26年2月22日（土）札幌市で北海道地区親睦会を開催した。
5. 同期会等の助成
研究室同窓会および地方親睦会等、卒業生による集会の費用を一部助成した。
6. 学部・学生との懇談会の開催
学部教員および在学生との懇談会を開催し意見交換を行った。
7. 課外活動助成
クラブの活動経費、大学祭費用の一部を助成した。
8. 就職ガイダンスの開催
各分野の卒業生による就職ガイダンスを海洋生命科学部在学生を対象に、平成25年10月24日（木）相模原キャンパスにて開催した。
9. 渔船海難遭児育英会寄付
漁船海難等により親を亡くした子弟に学費の援助を行った。

員情報の正確性の向上に努めた。

また、平成25年10月23日に名簿管理システムパソコンを新規入替えた。

てもらえるように希望されました。

〔平成25年度事業報告〕

1. 会報の発行

2. 同窓生の動向、海洋生命

3. 科学部の現状、および各種

4. 情報を含む会報を平成25年

5. 9月と平成26年3月に二回

6. 発行した。

7. 会員の現状の把握

8. 全学同窓会と連携し、会

9. 4. 親睦会の開催

10. 関西地区の会員を主な対象とした親睦会を平成25年7月15日（日）に大阪市にて開催した。

11. また、平成26年2月22日（土）札幌市で北海道地区親睦会を開催した。

12. 研究室同窓会および地方親睦会等、卒業生による集会の費用を一部助成した。

13. 学部教員および在学生との懇談会を開催し意見交換を行った。

14. クラブの活動経費、大学祭費用の一部を助成した。

15. 各分野の卒業生による就職ガイダンスを海洋生命科学部在学生を対象に、平成25年10月24日（木）相模原キャンパスにて開催した。

16. 渔船海難遭児育英会寄付

17. 漁船海難等により親を亡くした子弟に学費の援助を行った。

平成26年度予算

支出の部		収入の部	
科 目	予算額	科 目	予算額
1. 事業費		1. 部会助成金	4,622,000
(1) 会報の発行費	2,200,000	2. 会報郵送料補助	684,000
(2) 三水会HPの運営	200,000	3. 前年度繰越金	3,396,710
(3) 親睦会の開催	400,000	4. 預金利息	3,000
(4) 同期会等助成費	200,000	5. 雑収入	10,000
(5) 大学・学生との懇談会費	100,000		
(6) 準会員活動助成	200,000		
(7) 就職ガイダンスの開催費	250,000		
(8) 漁船海難遺児育英会寄付	50,000		
2. 運営・管理費	2,370,000		
(1) 印刷・通信費	420,000		
(2) 会議費	700,000		
(3) 総会費	250,000		
(4) 事務局費	950,000		
(5) 慶弔費	50,000		
3. 予備費	2,745,710		
合 計	8,715,710	合 計	8,715,710

10. 東日本大震災に係る支援活動や義援金活動の実施
平成23年3月11日に発生した東日本大震災で大船渡市三陸町にも甚大なる被害が発生したことに伴い、被災された三陸町の方々を支援するため、引き続き義

英会に対し、東日本大震災に係る支援活動や義援金活動の実施を行つた。平成23年3月11日に発生した東日本大震災で大船渡市三陸町にも甚大なる被害が発生したことにより、被災された三陸町の方々を支援するため、昨年度より引き続いて募金活動を行つた。

『平成26年度事業計画』

1. 会報の発行

同窓生の動向、海洋生命

科学部の現状、および各種

情報

情報を含む会報を平成26年

9月と平成27年3月の二回

発行する。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

行つてゐる漁船海難遺児育英会に対する寄付を行つた。

東日本大震災に係る支援活動や義援金活動の実施

を行つた。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

4. 親睦会の開催

各地区の会員を対象とした親睦会を開催する。

5. 同期会等の助成

研究室OB会及び地方親

睦会等、卒業生の集会の費

用の一部を助成する。

2. 三水会ホームページの運営管理

会員に対し本会の各種情

報を提供する。

3. 会員の現状の把握

全学同窓会と連携し、会

員情報の正確性の向上に努

める。

4. 親睦会の開

学部長就任の挨拶

菅野 信弘



7月より海洋生命科学部長を拝命することになりました。もとより浅学非才の身ではありますが、微力を傾ける覚悟でございますので何卒ご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

緒方前学部長には、4期8年の長きにわたり学部の舵取りを担当っていたいただきました。この間、東日本大震災による三陸キャンパスの被災、相模原キャンパスへの一時移転、相模原キャンパスM号館の建設、さらには三陸臨海教育研究センターの立ち上げと幾つもの大波に直面してきましたが、横波の直撃を受けて転覆することなく乗り切ることができました。これも一重に緒方前学部長の舵取りの所由と言えましょ。舵取りを引き継いだ身としては、緒方前学部長の下で教学関係の改善を進めてきた経験を生かし、海洋生命科学部の更なる発展を目指して舵を取っていきたいと考えています。

大きな課題の一つは、学部新卒生の就職率の低迷です。経済不況もその因ではあるでしょうが、学生の「三陸ブランド」が失われてしまつたことが最大の要因であるように感じています。このようなことに思い当たるごとに、三陸キャンパスには「三陸」というもう一人の先生が居たことを痛感させられます。現状の打開には、「三陸ブランド」に代わる「北里海洋生命科学ブランド」を創成していく必要を強く感じています。このためには他の海洋系、水産系大学との差別化を摸索していく必要性があるでしょう。幸いなことに現在大学全体として「農医連携教育」を推進めています。また、研究の分野では「海洋ゲノム科学」を推進する体制が形成されつつあります。こ

に付属臨海教育研究センターも開設されました。しかしながら、学部の拠点の引越しは一朝一夕で完了するものではありません。学部を取り巻く激環境の変化に対し、漸くハードウェア面での準備が整った段階と捉えて良いでしょう。平成26年度の4年次生が、三陸キャンパスで学ぶことを前提に入学した最後の年代となります。教育研究拠点を相模原に移したことによる影響は、受験者人数や受験者層の変化として表れて来ています。また、入学者は関東圏に集中する傾向がより強まり、自宅通学学生も増加しています。こうした変化とともに、学生が学部に求めているもの自体も変わってきているのかもしれません。学部としては、内外の変化を的確に捉え、迅速かつ柔軟に対応するとともに、さらに、大学教育のグローバル化や18歳人口の減少という大波を越えるための準備を整えていかなければなりません。

大きな課題の一つは、学部新卒生の就職率の低迷です。経済不況もその因ではあるでしょうが、学生の「三陸ブランド」が失われてしまつたことがあります。相模原キャンパスへ学部が移つてから早3年半が過ぎようとしています。相模原キャンパスへ教育研究の拠点としてM号館が整備され、運用が開始された新しいカリキュラムの運用が開始されました。平成25年度入学学生からは相模原での教育展開に対応

れらを両輪として、学部の新たな魅力、海洋生命科学部卒業生ならではの魅力を創成し、発信していきたいと考えています。

平成25年度入学生からは相模原キャンパスでの教育展開に対応した新しいカリキュラムが適用されています。このカリキュラムでは、「ラーニングスケール」、「インターーンシップ」等の科目を新設し、大学における学習への移行をサポートし、さらに卒業に向けた目的意識の涵養を図っています。また、学部が相模原キャンパスに移つた地の利を活かし、2群専門基礎科目の1年次配当を強化したほか、1年次科目の再履修の実質化も可能になりつつあります。一方、研究フィールドに抱かれた三陸キャンパスのような環境は相模原では望めません。新カリキュラムでは新たに「海洋実習」を新設し、学生がフィールドで体験的に学ぶ機会の強化を図りました。この科目は平成26年度に本格始動することになりますが、本科目の充実を図るために三陸臨海教育研究センターのハード・ソフト両面での整備が急務と言えましょう。

最後になりますが、海洋生命科学部では今後も教育プログラムの日本技術者教育認定機構(JABEE)による認定を継続していきたいと考えています。平成27年度は認定審査(継続)を受審する予定です。この審査の中には卒業生へのインタビュー等も含まれてくると思いますので、その折にはご協力をお願いいたします。

同窓会会員の皆様におかれましては、学部の諸事情をご理解いただき今後ともご支援いただきますようよろしくお願い申し上げます。北里研究所創立100周年・北里大学創立50周年記念事業募金は平成29年3月までとなつていています。使途の指定もできますので、臨海教育研究センターとして再出発する三陸キャンパスの整備にご支援賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

水産業の復興再生を願つて

食品学科3期生 遠藤 和則

昭和52年度食品学科生物化学研究室を卒業しました遠藤と申します。早いもので卒業から38年が経ち、今は津波被害を受けた三陸の状況を聞くたびに私が住む福島県相馬市との状況を重ねて想像するだけしか出来ないのが心苦しく残念でなりません。

そのような中、今年初めて三水会の総会に出席をさせて頂きましたが、その後の生化研究室同期再開を自論んでの出席ではありました。昔懐かしい面影を残した60歳の面々と、あまり変わらない緒方先生、老体(?)にむち打ち駆けつけて下さった児玉先生と楽しいひと時を過ごすことが出来ましたこと、藤森君、鈴木君そして同期生皆さんに感謝致します。

私の勤務する相馬双葉漁業協同組合は、平成15年に7漁協が合併、水揚高も沿岸漁業としては、平成元年をピークに震災前では70億円を越える水揚をしておりました。特に本所とする相馬原釜卸売市場には、大げさに言えば鯨以外は何でも揚がるという自負をいたものです。

組合員数1129名、沖底船29隻、小型船674隻を有し、底曳網・さし網・船びき網による漁船漁業と松川浦内のノリ・アサリ浅海養殖業を営み、全国

有数の水揚港として活気あふれる漁港でありました。

3・11震災で組合員101名が犠牲になり、漁船も79%が全損・一部損壊、施設においては本所・6支所のほとんどが全壊、被害額23・5億円という状況がありました。現在も仮事務所での営業を余儀なくされています。



あの東日本大震災から3年5ヶ月が過ぎ、一般的には落ち着きを取り戻しつつあるように見えますが、福島県産の産物は今も放射能汚染の風評を受け敬遠されており、我が相馬の水産物も大津波と放射能風評により、魚介類の大半が荷制限を受け、福島県全体で漁業を自粛、試験操業という震災前の操業と

このことは県が緊急時モニタリングによって福島海域を広くスクリーニングしたことで、基準値を超える魚種を選別した訳です。更に販売流通にかかる前に、漁協の自主検査を行います。魚種ごとに、加工品製品ではサイズ・品質ごとに検査を行い、この検査をクリアした魚介類だけに証明書を付けて出荷をするという本来の漁協とはかけ離れた販売業務を行っています。

本来、漁協は水揚を基盤として販売・購買・信用・共済事業等々の総合的な事業の収益をもつて、組合員に還元(配当)するという単純なものなのです。

漁獲物については検体数が多く、十分な期間安定的に自主規制値を下回っている魚種だけを水揚対象としています。（国基準値100Bq/kgに対し、福島県ルールでは50Bq/kgを超えないこと。）

タリングを開始、今年6月末までで約180種、15,000検体の調査を行つきました。その結果に基づいて放射能の影響のない魚種を選定、地区ごとの漁業者で構成する試験操業検討委員会で操業計画を協議、次に漁業団体・流通業者・大学研究機関・国県行政で組織する福島県地域漁業復興協議会での承認、更に県下漁協組合長会での承認後、操業に着手をするというプロセスを経て、漁獲・検査・流通までの流れを福島県ルールとして定め進めてきました。

は程遠い操業形態をとりながら進んでいるのが現状です。

している現実を目の前にすると、北里水産で培った三陸魂をもつて腹を括つて行くしかないと思いますし、水産で良かつたと今は心から思っています。

魚が好きだから、水産が好きだから復興のために微力ながら頑張りたいと思う思いであります。

最後になりましたが、三陸の地の復興を願うと共に、三水会の会長をはじめ役員・代議員の皆様のこれまでの活動に対し本会報をもつて感謝を申し上げます。更には会員各位の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

福島県の水産業は再生に向かって歩み出したばかりです。新たな発想で将来的の漁業を考えて行く必要があります。震災よりの施設復旧、東電の廃止に向けた動きと漁業の復興、そして福島県一漁協合併の動きと諸問題が山積

いるのが現状なのです。
今後、漁港施設等については、復旧支援事業等によつて元に戻りつつありますが、施設が整備されても消費者の信頼が回復されなければ、どんなに旨い魚を獲つても売れないのです。店頭に並んだものは安全で安心であることを見ること。流通を増やして、當時福島県産の魚介類が店頭に並んだ状態にしていくこと。そのためには、本格操業までに更に検査体制を整えて、消費者が安心して購入出来るようにして行かなければならぬと思つています。

そのため鮮度・品質の良い魚、より付加価値の高い魚を水揚、販売することに専心し、それが最終的には消費者により良い魚介類を提供することになりますが、それが放射能汚染という言葉で、常磐物として今まで培つてきた中央市場や消費者の信頼が失われた

大震災後の三陸の近況

北里大学名誉教授 野村 節三



これに関連して、当時、北里大学生命科学部二年生であつた瀬尾佳苗さん（20）が三陸公民館前で大津波に流れされ、今も行方不明であることは悲痛な出来事でした。その後、毎年三月十一日には御両親が慰霊のため越喜来へ來訪されて地元有志やボランティアの人達と共に追悼の集いが開催されています。

未曾有の大灾害「東日本大震災」から早くも三年四ヵ月が過ぎましたが、あの 大津波の爪痕は今でも当地の海岸、漁港、街跡などに残り、見る人々に当時の惨状を呼び起こしています。また、あの日、多くの尊い人命が失われましたが、現在確定している「平成三陸大津波」による気仙両市の被害者数は大船渡市では死者三四〇人、行方不明者七九人、陸前高田市では死者一、五五六人、行方不明者二〇七人に上っています。現在も警察による行方不明者の賢明な捜索が続けられていますが、相当な困難が予想されます。

復興にはソフト面として、心の復興が先決となり、犠牲者の鎮魂と被災地の復興を祈願して、毎年各地で地元住民による郷土芸能イベントが開催され、剣舞、鹿踊り、虎舞、七福神舞、全

時、北里大学生で大津波に流された瀬尾佳苗さんは悲痛なことは悲痛なことです。毎年三月十一日をめ越喜来へ來訪し、アシアの人に達成されています。

国太鼓フェスティバル、盆踊りなどが賑やかに繰り広げられました。

一方、ハード面では当地の復興第一号が今年四月に再開通した三陸鉄道南リアス線（盛一釜石）でした。

そのほかJR東日本の旧大船渡線（盛一気仙沼）のレール撤去後の舗装道路がB.R.T（高速バス輸送）と呼ばれるバス路線になって運行されています。

また、三陸縦貫道路の建設は急ピッチで進められ、最近、陸前高田市の岡崎から竹駒町まで延長開通し、現在、越喜来から吉浜までの巨大な陸橋をトunnel工事が進行中です。

こうした中で、越喜来では新養護施設「さんりくの園」（小出の高台）が落成しましたが、本格的な復興はようやく緒についたばかりで、浦浜海岸の防潮堤（高さ11m）と「越喜来小学校」（国道45号線沿いの高台）の新設工事や全壊を免れた「三陸公民館」の改修工事が始まり、雑草が生い茂る広い更地をダンプカーや重機が忙しく往来しています。

ところで、北里大学海洋生命科学部が相模原キャンパスへ移転した後、三陸キャンパスは「三陸臨海教育研究センター」として再出発することに決まり、大学院生や学部学生の研究・実習の場として、さらには国際的な海洋生物研究の拠点として、今後の発展が大いに期待されています。

さて、同窓諸氏は御存知のように、去る平成二十年に「学校法人・北里研究所」が発足し、同時に水産学部が「海洋生命科学部」と改称されました。そして同年、この新法人と大船渡市との「連携協定」締結を記念して、翌年当 地で「北里柴三郎記念展」が開催されました。

そこで、小生はこの時期に当つて、「北里柴三郎と後藤新平」と題した連載記事を地元の東海新報へ寄稿しました。

ところが、その翌年に起きた大震災で大幅に遅れましたが、この連載記事を基に一冊の本にまとめ、幸い「北里研究所創立百周年」に当る今年三月に経て昭和初期までの歴史的背景に立て、北里博士と後藤伯爵の盟友関係を縦軸に、その生涯で接した多くの先人ととの関係を横軸にして、二人の信念と足跡を述べたもので、それは現代人の道標になると確信して執筆した次第です。

本書は幕末から明治・大正時代を経て、北里博士と後藤伯爵の盟友関係を中心とした中で、越喜来では新養護施設「さんりくの園」（小出の高台）が落成しましたが、本格的な復興はようやく緒についたばかりで、浦浜海岸の防潮堤（高さ11m）と「越喜来小学校」（国道45号線沿いの高台）の新設工事や全壊を免れた「三陸公民館」の改修工事が始まり、雑草が生い茂る広い更地をダンプカーや重機が忙しく往来しています。

本書は幕末から明治・大正・昭和前期まで、激動の時代を切り抜いた、偉人北里柴三郎と後藤新平の信望者は小生（文末）まで御一報下さい。結びに、三水会会員諸氏にも御一読して下されば誠に幸いです。なお、本書購入の希望者は小生（文末）まで御一報下さい。大震災の三陸の近況報告を終ります。

Tel/Fax : 0192-44-3123



準会員活動報告

海洋音楽部主将 島村 玲美

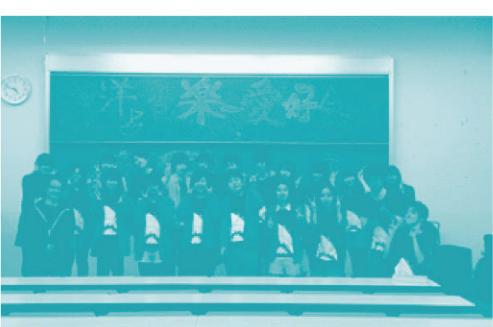
より一層充実した活動を目指していくますので、ご支援のほどよろしくお願ひします。

この度は北里大学準会員活動助成として交付していただき誠にありがとうございます。このような形で私たち海洋生命科学部北里会体育・文化会海洋音楽部の活動を評価して頂いたこと、部員一同大変嬉しい思っています。

部員を代表いたしまして深く御礼を申し上げます。

私たち海洋音楽部は震災の影響による三陸キャンパスから相模原キャンパスへの移転後再設立し活動しています。管、弦、打楽器、ピアノにギター、楽器は問わず音楽好きの学生たちが北里祭を大きな目標として、週一回程度集まり練習しています。昨年の北里祭では相模原キャンパスの吹奏楽団、十和田キャンパスの吹奏楽団、交響楽団の皆さんと合同演奏を行いました。また、東日本大震災の被災地の復興の力になれるよう音楽を通して募金活動を行いました。今年から海洋軽音部と合併したことを見つかけに、北里祭に向けて新たな挑戦をしようと考えています。そして音楽の力を活用し他学部の方や地域の皆さんをつなげ、少しでも被災地の方の力になればと思つております。

最後になりましたが、今回このような形で評価していただけたのもこの部活動を再設立してくださったOB・OGの先輩方をはじめ、活動に協力してくださいました。山田先生、神保先生、またお世話になつたすべての方々のおかげだと思います。この場をお借りして深く御礼申しあげます。まだまだ歩み始めたばかりの海洋音楽部ですが、皆様への感謝の気持ちを忘れず、



生物化学研究室三期生と 児玉先生・緒方先生を囲む会

三期生物化学研究室連絡係

藤森 年三



平成26年5月17日（土）三水会定期総会終了後、三期生物化学研究室総勢11名の内7名が集まりました。アラ還暦の見た目を漂わせながらも気分は時空を超えて完全に大学4年生モード！総会終了後の懇親会に引き続き、二次会には緒方先生を囲み数名の三水会役員の方々と共に恵比寿へ移動し20時より開宴。さらに児玉先生の登場で頂点へ、賑やかで楽しい時間を満喫し盛り上がりつた状態のまま解散、後ろ姿には『また会いましょう』の吹き出しが見えるようでした。

同期生の鈴木潤一氏は前期より三期議員を勤めており、私も今期より同代議員として席を共にしています。

それ以来、毎年5月の第3土曜日開催の三水会定期総会には研究室同期生に声をかけては集まるようになり、昨年集合と大盛況で喜ばしいかぎりです。

継続は人が人を呼んできます、そして撮った写真は会終了後みやかにCDに焼いて全員に郵送します、写真を見るとまた会いたくなるのが人情ではないでしょ

か。

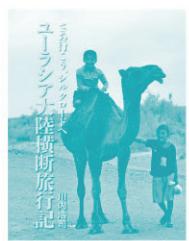
結びに、この

場をお借りして

会員皆様のご活躍と三水会の発展を心よりお祈りいたします。

川内浩司先生の『ユーラシア大陸横断旅行記』をめぐつて

水産食品学科8期 佐伯 修



この春、かねて刊行が予告されていた川内浩司先生の御著書『さあ行こう、シルクロードへユーラシア大陸横断旅行記』が、めでたく完成、「文芸社」から発売された。いわゆる教科書サイズA5判、ハードカバー、270頁の本文に、先生ご自身が撮影された、約500枚もの写真も収録されている。

刊行をお祝いして、私共旧水産学部分子内分泌学研究室（LME）をはじめ、主に三陸で先生の学恩に沿った面々が、先生がお住いの仙台で、先

生ご夫妻を囲んでささやかな宴を催した。また、7月20日から8月1日にかけては、同じく仙台で、本書に関連した先生の写真展「シルクロードの人々一期一会の縁」が、好評のうちに開催されている。

それにしても、あの川内先生が、何故「シルクロード」で「旅行記」なのか？と訝しがられる向きも、少なくないのではないか。サケのエンドルフィンなど、魚類の脳下垂体ホルモンの研究から、広く脊椎動物一般の脳下垂体ホルモンの分子進化の研究まで、川内先生とそのチームは、常に波頭を切って進んできた。紫綬褒章以下の受賞歴は、その裏づけと言える。

実を言うと、私もまた、北里を定めた」と口にされ、今度の本のプロフィールにもあるように、「旅行」と高

山植物の撮影に専念すると聞かされても、半信半疑だった。たしかに先生が、世界の「秘境」と言われるような土地を旅行されて、みごとな写真を撮影されていることは、耳にし、目にもしたが、実はそれほど「本気」にしなかつた。

だが、先生が口にされたことが冗談でも何でもなく、先生の「旅行」も、似いわゆるリタイアしたシニアの、レクリエーションとしての暇潰しとは、似非なるものであると、出来上がった本書を手にして、初めて私は思い知られた。

かと言つて、先生の旅は別に「冒険旅行」ではない。中国の西安からイタリアのローマまで、旅行会社の企画したバス・ツアーに参加した一部始終である。もともと、先生は、定年前の1995年頃から西安—イスタンブール（トルコ）間のツアーに目をつけておられたが、2002年に前立腺がんと診断され、06年大学を停年になつたが政情不安からツアーは中止されてしまう。以後、体調管理と体力維持のトレーニングを重ね、12年7月にルートを拡大の上再開されたツアーに応募されたという。まさに、覚悟の「観光」であり、本書はその記録に他ならない。

さて、本書の記述は、旅の過程を一應はなぞりながら、シルクロードの、人々、仏教、イスラム教、キリスト教、ゾロアスター教、など宗教や、タブー（禁止事項）について、あるいは、パン、麺類、果物など食物について、といたぐあいに、テーマ毎に各地を比較しながら綴られてゆく。「人々」の項目の、「結婚」という小テーマを見る限りでは、男が「漢」で女が「回」の婚姻

は不可だが、逆は可というよう驚くべき事実が、さりげなく書かれている。こういうことは、新疆ウイグル問題と、どこかで関連しているに違いない。また、「ペルシアの人々」というくだりでは、核開発などで欧米社会から孤立するイランの庶民たちの、意外な人々が、意外な人々や外国への関心の高さが、生き生きと語られる。他の場所でもそうなのだが、例えばウズベキスタンの日本人墓地の墓守、例えばイランのイスファハーンの川畔の群像、例えば、トルコのトラブゾン市場のファンキーな親爺と先生の物語る人びとはみな、キヤラが立っている。先生の人間への関心の強さを改めて知らされた。

知らされた、と言えば、私は川内先生が、幼少時代を旧滿州の本溪湖（現・中國遼寧省）で過ごされたことを、初めて知った。私のこれまでの経験では、いわゆる「外地」生まれや育ちの人のびとに、一種の本能的な国際感覚のようなものを覚える場合が多いのですが、言われてみれば、先生にも思い当たることが少なからず感じられた。

先生は、本書の冒頭で旅の目的を箇条書きされているが、その中で最も大切なのは、「人々との一期一会を言祝ぐことだ」とされている。この本を通じて気づかされたのも、そのことで、先生は、一九八〇年にTVでご覧になったシルクロードの現地を、一目見たいという年来の願望を、真剣に果たされたのだ、と思う。それは、一度しかない人生の時間を、悔いなく送ろうという決意によるものだ。

もつとも、まだ先生には、再度の大逆転のサプライズもあるかもと、私は期待している。

— 新刊紹介 —

FA23期 黒岩 裕樹

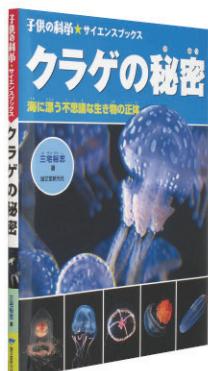
子供の科学・サイエンスブックシリーズ 「クラゲの秘密—海に漂う不思議な生き物の正体」

◆誠文堂新光社刊
◆三宅裕志著

●不思議なクラゲが面白い

生物学者の下村脩博士はオワンクラゲの研究を通じ、ノーベル化学賞を受賞。山形・加茂水族館（クラゲドリーム館）は、廃館寸前の窮地を、クラゲの展示で脱した。

科学的研究や癒やしの存在として人気を集め一方、海水浴で刺された痛い思い出や、大量発生したミズクラゲが取水口に詰まる被害、水産業界ではエチゼンクラゲやキタミズクラゲなど、漁業被害も大きい。ただ、酢の物や和え物などとして食する機会もあるほか、薬や化粧品素材にもなっている。



気づけば身近な存在なのだが、一般的に描かれる「ふわふわと漂い、傘の下から長い触手が出ている存在」がすべてではない。成体と異なり浮遊せず、岩などに付着して育つ幼生からがスタート。ただし、中には成体になっても触手をもない種もある。体内の櫛（くし）板が反射して鮮やかな虹色に光って見える種があれば、ほかの生物と共生なしに生きられない種もある。

生活域も海水から淡水、熱帯から極域、表層から深海と幅広い。寿命が来ても死なず、若返る奇想天外なベニクラゲに至っては、果たして人間とクラゲ、どちらが進化していると言えるのか。

こうした「クラゲの秘密」を、北里大学海洋生命科学部の三宅裕志講師が上梓（し）した。クラゲ類などの研究を主に手掛け、新江ノ島水族館で飼育アドバイザーも務める氏の著書は、散りばめられた多くの謎への解説と、貴重で多彩な写真と共に、「子供の科学」以上に、大人が魅了される一冊になっている。

●問い合わせ先・誠文堂新光社販売部

03-5800-5780

“掲示板”

■「潜水部OBの集い」のご案内

日 時：10月18日（土）PM1時から4時まで

場 所：北里大学相模原校舎内

申し込み先：越川 090-2339-4062

定員があります。定員に達し次第、締め切りとなります。なお、雨天時は中止の場合がありますので、申し込みには携帯番号をお知らせください。

■「北里祭」開催のご案内

2014年11月1日（土）～11月2日（日）の二日間

相模原キャンパスで開催されます。

漁火ブース、北里三陸湧昇龍部など海洋生命科学部北里会の出展、出演もありますので、ぜひ、ご参加ください。

編集後記

2014年の夏も自然災害による被害が日本各地ありました。特に広島での土砂災害は多くの犠牲者が出てしまいました。たいへん残念なことです。この場を借りて哀悼の意を表します。集中豪雨や竜巻などここ数年の気象状況は大きな変調をきたしているように思われます。原因はわかりませんが、自然環境に変化が生じていることを感じるこの頃です。会員の中にも自然環境や自然界の仕組みに関心を持っている人も多いと思います。自分や家族の身を守る意味でも興味をもち、関心を持ってみることも大切かと思います。三陸で学んだ我々は自然の脅威、力強さを体験的に知っています。それらを活かす時代が来たかもしれません。

さて、海洋生命科学部では今年度から海洋実習を2年生対象に実施しております。このプログラムの中には三陸での実習も含まれており、今年度は63名の学生が三陸での実習に参加しました。地方と自然に触れるたいへん有意義な機会であったと思います。また、新しく建築したばかりの大船渡魚市場の見学や大船渡食品（阿部長商店）の工場見学が実施されました。これらの見学にあたっては現地の方々の協力と大船渡市で活躍する卒業生の方々の協力を頂きました。これからも会員の皆様の力を借りて親睦の輪を広げながら、学部や地域との交流の一助ができればと思います。今後ともご協力をよろしくお願ひいたします。